

今井半次郎 石狩炭田に於ける夾炭第三紀層(石狩統)の層位地質學的研究 地學雜誌 大正一三年
村田 析 社友別冊見やすき爲めに 昭和五年八月

參照せる主なる論文

夕張地方の地質學的觀察

夕張炭田の地質的觀察

石狩炭田の炭層狀態に就て

幌內層の研究

栗山地方の地質

北海道石炭礦業會 北海道礦業誌 昭和三年九月
小樽商學學校 北海道石炭業概論 大正五年六月
鐵道省運輸局 石炭礦炭石油に關する調査 昭和二年

十一月

可野 信一 樺太の石炭礦業と殖民 日本鐵業會誌 昭和六年七月

小國 樞城 夕張發達史 大正四年一二月

山口彌一郎 常磐炭田に於ける炭礦聚落構成 地學雜誌 昭和六年一月

地名の地理學的考察とその一例 (六)

小林 悟 一郎

i ウチ

之も山と山とに抱かれた所即ち谷をよぶ古來からの言葉であることは周知である。カウチなど多いものである。それで谷地をよぶウチとして地形詞の部に入れたのである。併し内外のウ

チと別ち難いまでに使ひならされて居り、又それと原義に變りはないので一緒にした。總數は四十で、その中山地部に屬すべきものは二十四である。平地部のものの中栗ノ内土居内(三)開ノ内(神)内開・内野(瀦)陣ノ内(井)等は内外の

内の意しかないものである。又内砥川(杵)野ノ内(瀨)河原内(山)内田、山ノ内(八)内野(井)外一は他側の山麓であるので、以上を除くと平地に於ける地形詞としてのウチは極めて少いと言はねばならぬ。その反對に山地部は大體地形詞ウチのものであつて、位置詞の内は少い。河内は十四あり、外に河を主にして内河(筑)内川久保(神)等といふものがある。河内の中平地部の佐賀郡の(東)(西)河内は果してカウチであるか、或は小路をコーヂとよぶ爲の誤りか―神崎では現に小路をコーヂとよんでゐる、コーヂから河内麴などと用字されるに至る様である―判断を明かに下してゐないが、今はこの部に加算しておく。

この部で斷つておかねばならぬ事は、三井郡の鞍打、打添と東松浦の相知とである。鞍打は小川に沿ふてゐてたしかにクラ内である(クラの部参照)クラ・ウチ共に谷を指稱したものである。打添の打も内に違ひなく、内添であつたものであると思ふ。この外にもウチには宇治とも

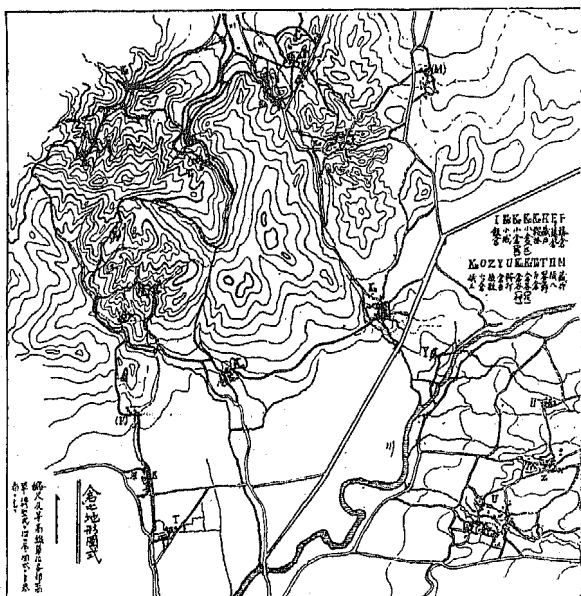
當てることは古來多い。相知は松浦川の中流の炭坑町であることは周知であるが、この通谷は由來交通の要路である。これに似た地名では相知(肥後)會地(信濃)相内(陸奥)大内(讃岐・伊賀岩代)邑知(石見・能登・播磨)等多い。大内を除けば大抵の所陸奥の相内が眞の用字であると思ふ。能登の邑知がこの相知と共に交通の要路に當り、地溝に位置することは有名な事實である即ち相知は相内と見なしてこの部に入れたのである。相に就いては別に論ずる。

尙東松浦の現野は内ッ野であると考へるのである。

j クラ

主として獨斷に依つて本項を設けたのである即ち從來はクラといふことを地形詞と明かに解釋してゐない様である。一二の學者はその傾向を認めるがまだ定説とは言へない位置にある。併し余はウチと共に谷を他の意味に於いて表はした詞として、之を一項として排列したのである。

第九圖



地名の地理學的考察とその一例

勿論クラには庫・廩があること、思ふ。併し筆者は今すべてを谷を示すクラと假定してこの項に集めてみた。すると左の如きものがフィールド内にあつた。

倉谷・小倉・寺倉(筑)飯倉(早)藏持・小藏(糸)岩藏・小ヶ倉

(小)倉谷・藤ヶ倉(神)藤倉・小倉(三)蔵戸・田倉野(神)蔵
 數・鞍懸(八)鞍打(井)藏八(浮)朝倉・倉吉(朝)
 右に依つて見ると背振山地に十一、其他に入となるが鞍懸鞍打朝倉は各その側に於ける山麓で眞の平地部は五個である。又庫廩の意味のもの

のと思はれるのは用字から言へば飯倉藏持藏戸藏ノ上等がある。特に藏戸は、近く隣郡に寄人ヨリヒトなど職制らしいのがあるが之等も地形詞とされないことはない。藏持のモチは用字と異なる意義を有するであらうことは他項に述べる。又飯倉は小田部などの地名もあれば、屯倉の地―或は官藏を音讀して尙ハンゾウと訛つて傳へられてゐると思はれることが筑紫郡の高宮にあるので、ハンゾウの音に充用されたものと言へるかも知れない―かと思はれるが、小田部に就いては後述することにして、此の飯倉も屯倉の明かな記録も得てゐないし、小さい谷を東に有し、飯は以後も關説することがあると思ふが藪から來たものもあれば、谷―

ヤの音に通ずる「イ」及「堰」から來たものもあつてすべてがイヒ(今の強飯延いては米糧)に限つたものでない。斯るものも文字にのみ拘泥したら正當に解釋して行くことは困難であらう。之等のクラに就いてまづトボグラフィを作つてみた(第九圖)。

さてクラを谷と獨斷した論據を示して置きたい。筆者が最初自らクラに就いて暗示を得たのは、地形調査からすべて谷または低地にあるといふ概念を得た時であつた。而して後從來のクラに就いての諸説を聞いて培々考を堅めたのである。從來の諸説を概括するにA朝倉に就いては古記はみな朝闇の意に説く。即ち山が東にある爲め朝日の直刺す國でないといふわけである。その考へにより朝闇寺と言つた寺が、今では長安寺として尙遺稱されて來てゐることだけは事實である。B、宜長の古事記傳には「勝クラ」について説いてゐる。之は看過してならぬこと、思ふ古事記上卷に「殺さえまし、迦具土神」の體の各部に生りませる神の中、陰かみになりませる山

神を「關山津見」と申すことがある。また伊佐那岐神の迦具土の神を切られた十束劍の手上に集る血の、手俣より漏はき出でて成りませる神の名は「關淤如美神次に關御津羽神」といふ所がある。之等から見ると勝・手俣をクラといつたことは確かであらう。胡床ゴシヤの如きも上の考へから押せば、アは足でクラは勝即ち足を勝に組むといふ意とされ、胡床は然うする時の座といふ様に、從來の胡床ゴシヤの見説を逆に説くべきかも知れない。手股・股の分岐は谷頭に於ける形勢に類すると思ふ。關山・關淤加・のクラは地形に關するものとも見做される。人體と自然地形とは同語を以つて類似形を表される場合が多いのである。關い所は奥であり藏所であるといへば、關―谷間―藏のクラが結び付けられるが、併し朝鮮では古來谷をコルと言つてゐることを金澤博士は結び付ける。

今日に於いても村落を洞といふのは谷に聚落あるを普通とする所からであるといふ。洞は朝鮮での音は Ton であるが、訓みは音 Kor であ

る。そして全氏は蒙古でも山谷を谷の即ち *holo* といふことをも之に關係ありとされる。

以上の兩説の検討の傍證ともならばと思ひ、本地域に於けるクラを案じてその谷の方向を調べた(第九圖參照)。即ち關が原であれば東又は南が開けぬ谷を呼ぶべきではなからうかと考へたからである。その結果は寺倉小倉(早)小ヶ倉(小)倉谷(神)等はそれに相當してゐる。尙東に山ある谷といふ條件であれば、このフィールドの大勢からかも知れないが藏數以外は左様である。併し之の事は兎も角として余の考へでは鮮語のクラの傳はりはたしかにあらう。洞穴をホラアナといふ、そのホラは洞の鮮訓コルの轉通したものであらう。又古事記に於ける「輕」「玖琉」などの地名人名はその系統であらう。さりながら日韓に於ける語意の轉移は異つてゐて、彼に於けるクラは村落といふ風に轉じて居り、我に於けるそれは倉・關と相通ずるかと思はれるに至つてゐる。倉をクラと韓で言つた事を聞かないし、關も雲を屈林といふ外には

それらしき韓語を見ない。余の狭い見識かも知れぬ。若し倉・關をクラといふことが日本に於ける發生であると見るならば、それ等は谷の意のクラから轉じて來たのではあるまいか。

日本に於ける倉庫の初期は住家のそれに似たものではなかつたらうか。即ち斜面に切り込んだ落し竈式のものか、横穴であつたと思はれるそれで日本に於いては倉も關から來たのであるまいか。而して關は谷の意のクラに由れる言葉であつたであらう。このフィールドに於けるクラも多くは谷頭にあることは三者相關を暗示する様にも思ふ。兎もあれ谷のことを倉といつたことはたしかであると斷ずる。その傍證をも少し程あげると、小倉といふのに大きな、深い、急な谷と言ふのはない。(筑)(三)などもそれである。又どれも谷と取つて見て前後の字と不都合な配置にならぬ。岩藏・鞍打・朝倉(之は皇居になる前からの地名で必ずしも朝關とすることはいらない、朝は淺、麻などと思はれる、ことに附近の地名に麻―マ、アサーは多い)等は殊

更である。倉谷、藏入も余は全一と考へるが、クラタニと反復するのは差支ないと思ふ。萬葉にもクラタニとはある。その用ひる意味の同じとして起原の異なるものは重復して用ひられることは多いことである。

カカヒ

峽は狭く深い谷を指す如く一般に考へられてゐる。併し地名として之を見るとさうまでは言はれない。單に谷位の意味である。之は地名を附ける場合の誇張感にもよるかも知れぬ。然し乍ら余はこの事がカヒの言葉にも關係あることだと思つてゐる。韓古語にカレムといふ語は河江を意味する。之が本邦に傳來はしなかつたかと思はれる。カレとなつて Karen の m の消滅といふことがあり得ると信ずるならば、之に依つて解決出来る地名が多くある。m の消滅は確かにあつたらしく、小流を Kari Kar といつてゐる。又 Kai ともいふのは Kari から來たのであると思ふ。古事記に輕境岡宮カレノカミなどある輕は谷と取られるかも知れぬが、余は川であつたと思

ふ。輕島ノ明宮(應仁)などより然う思はれる。即ち却つて斯ることが日本に於いてカイ、カヒを谷に用ひる初めではなかつたかと思ふ。深い谷と限られないといふことは、カヒの起りが川—谷といふ位のものであつたからだと思ふのである。勿論カレから轉して來たのはカイであつて峽の邦訓はカヒであるから別語だとされるかも知れない。即ち河アヒと言へもしやう。アヒに就いては別項に述べるが若し然りとするも尙河に關係あり、且つ深谷と定義されないことだけは動かぬと思ふ。

この地域に於けるカヒは多くない。そして大抵「貝」字を當用してゐる。貝野(小)貝方(三)＝石貝(三)である。石貝は些か疑問を挿むべきかも知れないが、尙少々の起伏ある地で峽と見做されるのである。又三井郡には刈又といふのがある。このカリも鮮語らしく、韓來の民族聚落らしい所で、川又乃至は峽であると思はれる。糸島の香力もカリキで川キであらうと思ふが、之等は又河の項に關係することである。

其他では「會根」を谷のこと、いふ説がある。之に就いては筆者の考へを一項を設けて述べ度いと思つてゐるので後項に譲る。尙内をナイとよみて谷の意あるもの、「澤」に水澤の意以外なる谷の意あるものなどが地名に窺はれるが、今の所フィールドに關係ないので略する。

入込みたる所である。屈間ククマの意であると言ふが、クマ取るのクマもあることであらうし、クラ、クボなどとも通ずると思ふ。殊にクボと關係ありと思はしめるのは、糸島に三雲といふのがある。雲は雷山の雷神などに因つて説かうとする人があるが、クボ↓クモ、Do-mo は、ハマ相通に依つたものらしく、引いてもモーマの相同を傳つて來るのではあるまいかと思ふのである。即ち三雲の雲はクボの轉で尙クマの原體と考へるのである。更にクラと相通することを信ずるならば却つてクラ→クマ→クモ→クボの系統となることと思ふ。

クマの分布及數は左の通りである。

地名の地理學的考察とその一例

背振山地三十六、其他山麓五、平地部九
總數五十である。この分布と地形との交渉を簡示せん爲めに、分布圖(第十圖)を作つてみた

第十圖



界にあることもそのまゝ、表はしてゐて面白と思ふ。山地部に屬するものでもその限の底部が平地でないものは少いのである。背後の斜面が凹状をなし、聚落はその斜面の下部と、そこに抱かれた平地部に跨ることが普通である。山麓線の聚落發達は一般の法則ながら、この限の地名が教へる標式は有益であると思ふ。

分布に就いて抽象されることは山麓に多いことである殊に熊添、熊本、熊崎などは全く地形上の境

隈は暴風を防ぐことも多い、自然の防壁である。この條件は大抵の谷が一應は有することであるが、この一般に隈と言はれてゐる所は交通に於いて、平地との交渉には谷より便利である場合が多い。實に隈は一乃至はそれよりあまり多からざる聚落の爲めの天與の位置と思はれる隈の向き方から考へると、多くの聚落は夏の風は強くても冬の風ほど避けてはゐない。即ち夏の風は涼を取るといふ日常需要心から、例へ暴風といふ非常時のコンデションがあつても必要がられてゐる様に思ふ。冬の風はその反對である。勿論南東といふ方向は明るい陽、日射の方向でもある。も一つは山麓に於いては背後の斜面に掛る位置は晝夜氣温の變化の少いところとして好都合な處から、隅の凹状斜面に家を有することは好都合であらうと思ふ。故に時としては凹状斜面そのまゝの聚落形を見る。そして中谷には家が缺けてゐる。この場合は上下の交通即ち坂路を避ける必要上、等高線に沿ふ即ち凹面に従ひお隣りとの交通を主とした屋間小路

を作る方が便利だといふ條件に支配されて上下の發達を制されたのもある。兎に角この地形が致せる灣状半圓状乃至は弓状聚落は平地部に見ることの少いもので、山麓の特色かも知れない。崎に於いては反對なものが表はれることがある。その外の抽象事項としては、概して筑前に殊に多いこと、東松浦には一つもなく、又肥前の純平地部には大詫間島を除けば―後述―無いといつていい。その中筑前に多いといふことは、一般に筑前には小丘陵が多く分布してゐる爲めであらうと思ふ。

尙分布圖に依つて示される通り、二十米線以下では隈の分布が極めて減少してゐる。又百米線から上つた所には二つしか見えてゐない。

用字に就いて見ると、隈の外では熊が可なり普通の當僱字である。熊添・丸熊(筑)熊崎・熊本(早)熊川(小)熊本・江熊野・佐熊(佐)熊野(八)以上九個ある。この熊が動物でないことは各々の地形に依つて斷ずることの出来る事である。

その他福母(杵)大詫間(佐)樂間(三)久未(山)

宅間田・久未(八)小物ノ上(浮)といふ様な用字がある。福母は前記の三雲と共に論ずべきものであると思ふ。この三雲と福母はクボに入れずこの部に加算してゐる。大詫間は大野島の肥前側の村名であるから、大を除くと詫間となる。田隈(早)といふ實例に照してこの部のものと信ずる。それに反して宅間田は田隈田となり、田を重用するわけであるが、田隈が初來の地名であつたのが、その作田の地を田隈田と呼ぶに至れるものと思はれる。その位置する地勢から見ても隈であり、宅間田の東部を久未といふこと

オーベルニユの旅 (二)

本 間 不 二 男

は、之れが傍證となると思ふ。宅間の用字に拘泥したくはない。山門の久未もクマに當てたものと思ふ。訓讀するのが誤りである。樂間も地形ガラ隈であること明瞭である、ラは別述する。小物ノ上は些か無理かと思つたが地形が然う思はれるし、菰ノ上小森ノ上などではなく、近くに西隈ノ上東隈ノ上がある點から見ても、隈ノ上の轉としたのである。これに似たものに小物成(神)があるが本項には加へてゐない。古用字として古事記中卷には石埦イシヅマなどの用字を見るクマも相當の古い語といへ様と思ふ。
(未完)

中央フランス紀行

七、ヴィシー 巴里のガール・ド・リヨンを十

オーベルニユの旅

二時五分に出發し炭酸泉で有名なヴィシー(Vichy)に着いたのは十八時一寸過ぎである。湧出口は蔽はれて見る事が出来なかつたが、其の流